

広報 すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

{ 2/15 }
平成30年(2018年)
No.2222

杉並のアトリエに 101歳の笑顔広がる。

日本の女性画家の第一人者であり、シルクロードをテーマにした鮮やかな色彩の作品で知られる入江一子さん。101歳を迎えてなお元気にキャンバスに向かう姿が人々の感動を呼んでいます。29年には「100歳記念展」を開催し、大きな話題を集めました。今回は、阿佐谷にある私設美術館「シルクロード記念館」を訪ね、入江さんの絵にかける思いや阿佐谷での暮らしについて伺いました。

特集



すぎなみビト

入江一子



Contents —主な記事—

6 | 3.11を忘れない 7 | 3月は自殺予防月間です 8 | 長寿応援ポイントシールの有効期限 16 | すぎなみサイエンスフェスタ

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🌐 区ホームページ: <http://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。



↑
すぎなみビト
×
interview
入江一子

プロフィール：入江一子（いりえ かずこ）、画家。山口県萩出身。大正5年、朝鮮（現在の大韓民国）の大阪（宇治）に生まれる。昭和13年、女子美術専門学校（現在の女子美術大学）師範学科西洋画部卒業。同年、洋画家・林武氏に師事。昭和44年、シルクロードをテーマとする作品の制作を開始。平成29年、「入江一子100歳記念展」を上野の森美術館で開催。

私にとって最も大切なのは、「絵」なんです。

便利で住み心地のいい阿佐谷に愛着

—29年1月に開催された「100歳記念展」は大盛況でしたね。
 たくさんの人に来ていただき、画家人生の集大成と呼ぶのにふさわしい個展になりました。驚いたのは、中国をはじめシルクロード沿いの国の人たちが大勢来てくださったことです。入口の看板に「シルクロードに魅せられて」とあったからかもしれないですね。

—ライフワークであるシルクロードの絵を描き始めたのは、どんなきっかけがあったのでしょうか。
 女子美術専門学校の学生だった頃、スケッチ旅行の先々で石仏に出会い、魅了されました。それがきっかけで台湾や中国の石仏を訪ね歩くようになり、卒業後は満州のハルビン、チチハルと周遊して、各地で個展を開催して回るので大冒険です。そうした日々を送る中、チチハルを流れる大河・嫩江（のんこう）が夕日に真っ赤に染まる光景を目の当たりにしました。



血のように鮮やかな赤色に染まった川面に小さな船が一隻浮かんでいる様子は息をのむほど美しく、感動的でした。カメラは持っていませんでした。私はその光景を脳裏にしっかりと焼き付けました。

時は流れて30年後、スケッチ旅行でシルクロード沿いの国々を訪ね、最後にイスタンブールを訪れたときのことで。早朝、ホテルの窓の外が真っ赤になっているのに気づき、飛び起きて窓を開けると、目の前に広がるボスポラス湾が朝日を受けて真っ赤に染まっていたのです。そのとき、夕日に染まる嫩江を見たあときの感動がはっきりとよみがえり、シルクロードをテーマに絵を描こうと心に決めました。

—その後、絵の題材を求めて多数の国を巡り歩いたのですね。
 スケッチ旅行で訪問した国は30カ国以上になります。その中には、シリアやアフガニスタンなど、現在、戦場になってしまった国が多数あります。私がスケッチした数々の遺跡も、もう破壊されて無くなってしまいました。平和な時代にあの国々を巡ることができたのは、本当に幸運なことでした。混迷は深まるばかりですが、何とか平和になってほしいと願ってやみません。

—シルクロード記念館がある阿佐谷には、60年以上お住まいになっているそうですね。
 女流画家協会が発足したと聞いて、教師をしていた島根から駆け付けるように上京したのが昭和22年のこと。それから中学校や小学校で美術教員をしながら画家として活動するようになり、昭和31年に阿佐谷に家を買って母と暮らし始めました。引っ越してきたときは、まだ新宿から荻窪まで都電が走っていたんです。
 長年住んだ自宅兼アトリエを改装してシルクロード記念館をオープンしたのは平成12年です。建築計画の段階では、私のもう一つのアトリエがある鎌倉に建てた方がいいという声がたくさんありました。鎌倉は観光地ですから、1人でも多くの人に来ていただきたいなら、確かにその方がいいでしょう。私も、年を取ったら富士山の美しい姿を望める鎌倉で、悠々と画家生活

を送りたいと、かねて思っていたのですが…いざとなったら「やはり阿佐谷に建てたい」と思ったのです。不思議ですね。ここに住み始めてすぐ、コンビニもできたし、宅配便の店もできて簡単に荷物を送れるようになりました。街がどんどん便利になり、住みやすさを実感するようになっていきました。離れたくないという気持ちが大きくなっていったようです（笑）。今も昔も庶民的で親しみやすい阿佐谷の街が大好きです。いい場所にシルクロード記念館を建てたと思います。

—画家と教員の“二足のわらじ”だったのですか。
 そうです。教員は60年続けました。上京直後は中学校教員でしたが、しばらくしてから志願して小学校教員になりました。それは、子どもがかわいくて大好きなのと、そんな子どもたちが描く絵が持っているプリミティブさに触れたいと思ったからです。母には大学まで行ったのだから、大学の先生にでもなったらどうかと言われましたが、やはり私にとって最も大切なのは「絵」なんです。

—新たな作品に挑戦したい
 —101歳という年齢を迎え、心境に変化はありましたか。
 今年のお正月に体調を崩してからというもの、少し言葉が出にくくなり、「さすがに100歳になると、元気なままではいられないのだな」と思いました。それまでは、健康に何の不安もありませんでしたから、海外にもたびたび行っていたんですよ。100歳記念展に出展した「四姑娘山の青いケシ」を見てチベットに行ったのは76歳のときでしたし、84歳のときには、モンゴルの首都ウランバートルから遠く離れたロシアとの国境沿いまで行って、テントで2泊してきました。でも、それが最後のスケッチ旅行になってしまいました。体が丈夫なら、また海外にスケッチに行きたいですね。

—元気な画家生活には、どんな秘訣があるのでしょうか。
 特別なことは何もしていません。子どものころから「何事も気力」だと、ずっと思っていましたから。小学校1年生のとき、1日1枚絵を描くと決めて、それをずっと続けました。りんごがあっても描かなければ食べない。そ

んな子どもでした。学校が終わった後は、校庭で一人、絵を描いていました。ある日、見回りをしていた校長先生が私のところまでやってきて、「お前はよくやるなあ」と言って褒めてくださった。まるでグローブのような手で頭をなでくれたことを今でもはっきり覚えています。
 年を取った今は、周囲に迷惑を掛けまいと気力で頑張っています。甘えるのが当たり前になるのが嫌なんです。寝たきりの生活になってしまいうそで。いつかは死ぬわけですが、最後まで元気に過ごして、そのときが来たらパタンと死にたいと思っています。



—これから挑戦したいと思っていることはありますか。
 できることなら、女流画家協会展と独立美術協会展に出品するために作品を描きたいと思っています。どちらも、何十年にわたって、毎年、欠かさず出品してきた展覧会です。描くとしたら200号サイズの大作です。200号って、大きいんですよ。背が届かないので踏み台の上で描くのですが、一度ひっくり返ってしまったので、思い通りに描けるか少し不安があります。でも、そんなことよりも、「とにかく絵を描きたい」「絵のためになら何でもしよう」という気持ちの方が大きくて強い。これは、恩師である林武先生から学び、ずっと大切にしてきた画家としての精神です。それを忘れず、納得のいく絵を描き続けることが私の一番の願いです。

女子美術大学の思い出と後輩の皆さんへ

家庭を彩りあるものにする 美的感覚を学んでください

私は昭和9年に女子美術専門学校（現在の女子美術大学）に入学し、その翌年、学校が本郷菊坂町（文京区）から杉並区和田へと移転しました。私も本郷から引っ越して高円寺駅近くのアパートに部屋を借り、徒歩で学校に通いました。楽しく充実していましたが、学べば学ぶほど、画家を志すことは大変なのだと思われました。
 画家の世界はとて厳しく、環境に恵まれていないと目指せない道です。ですから、画家になろうかどうか悩んでいる女子美生がいるなら、画家以外の目標を持ってほしいのではないかと思います。
 私は、女子美生の皆さんが学生時代に美的感覚を養い、その才能を生かして家庭生活を彩りあるものにできたなら、何と素晴らしいことかと思えます。家庭が、さまざまな色彩のものに彩られ、美しくあるというのは平和なことですよ。光と色彩に対する感覚を育み、その才能を生かして家庭生活を明るく美しいものにしてください。

入江さんが学んでいた頃のキャンパス→

▲画像資料提供—女子美術大学歴史資料室

入江一子シルクロード記念館

住居を改装して平成12年に個人美術館をオープン。館内には入江氏のライフワークであるシルクロードを題材とした作品を中心に常時100点以上の作品が展示されています（詳細は、同館 <http://iriekazuko.com/>参照）。

住所：阿佐谷北2-8-19（JR阿佐谷駅下車徒歩6分）
 開館日時：金・土・日曜日、午前11時～午後5時
 休館：年末年始（12月25日～1月3日）
 入館料：500円（中高生300円。小学生以下無料）

中央線が描かれた入江さんの作品「追想・あさがや」1999年

阿佐谷の自宅兼アトリエで、母と妹、飼猫と過ごした日々を回想して描いた作品。入江さん一家を包むかのように今も健在の白バラのアーチが描かれているほか、その背後には当時の家の2階から見えたという中央線が描かれている。

シルクロードをテーマにした美術館です！